

トレーナー TRAINER

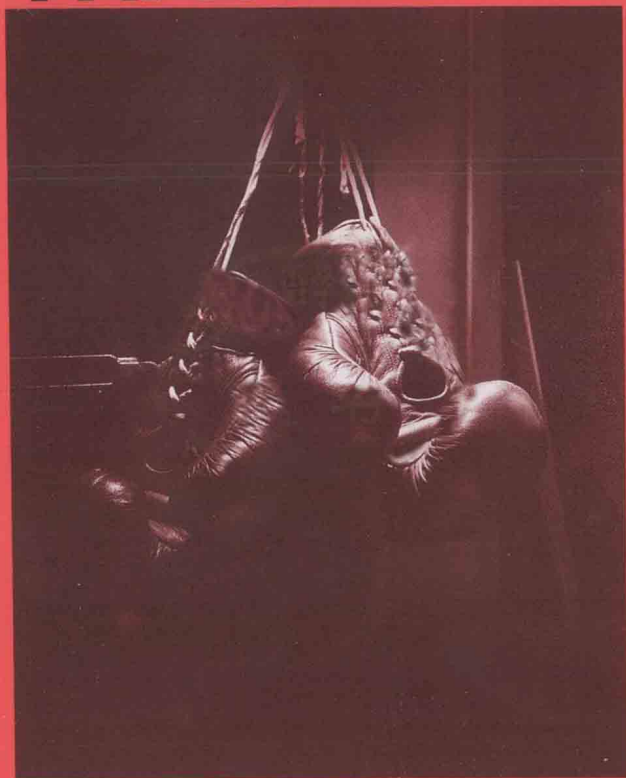
織田淳太郎
Oda Juntaro



トレーナー TRAINER

Oda Juntaro

織田淳太郎



織田淳太郎おだ・じゅんたろう

一九五七年北海道室蘭市生まれ。早稲田大学卒業後、土木作業などのアルバイトを転々とする。編集プロダクション勤務を経、本格派スポーツライターとして『Number』誌上他でスポーツ全般にわたるジャンルを執筆。主な著書に『狂気の右ストリート 大場政夫の孤独と栄光』（中公文庫）、『拳闘王辰吉丈一郎』（学研）、『巨人軍に葬られた男』（風媒社）、『完全版 長嶋茂雄大事典』（PHP研究所）などがある。

トレーナー

一九九八年八月一五月初版印刷
一九九八年八月二五月初版発行

著者 おだじゅんたろう
織田淳太郎

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

〒一〇四・八三三〇

東京都中央区京橋一・八・七

電話 販売部 〇三(三五六三)一四三一

編集部 〇三(三五六三)三六六四

振替 〇〇二一〇・四・三四

印刷 三晃印刷(本文)

大熊整美堂(カバー・表紙・扉)

製本 小泉製本

Printed in Japan CHUOKORON-SHA, INC.

© 1998 Juntaro ODA

ISBN4-12-002821-6 C0093

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

トレーナー

装丁 辰巳四郎
カバー写真 PPS
DTP オフィス・トイ

ボクシングの世界王者を殺害したとして、かねてから疑惑の目を向けられていた元トレーナーが、二十三日午後九時頃、足立区の西^{にし}要^{かなめ}署に自ら出頭し、犯行を認めた。同署はただちに元トレーナーの身柄を拘束、緊急逮捕した。

（新東京新聞 平成九年十二月二十四日付朝刊）

第一章

カーテンの隙間から薄日が差し込んでいた。日常的な往来のざわめきが、耳にうるさい。意識が揺り起こされた。目を開けると、おれはベッドの中にいた。女が隣にいる。汗と香水の

入り交じったすえた匂いがした。女は背中を向けて、かすかな寝息を立てていた。ピンクの毛布から吸いつくような白い肩がはみ出している。右の肩に絡みつくロングのソバージュヘアが艶めかしい。

女は裸だった。おれも一糸纏わぬ格好をしていた。

記憶のスクリーンが緩やかに時間を遡った。

そうだった。東の空が曙光の茜色に染まりつつある頃、おれは泥酔状態で、この女のマンションに転がり込んだのだ。

女は切れ長の目を眠そうに擦りながら、おれを迎え入れた。薄緑色のネグリジェに黒いショーツが透けて見えた。

部屋に上がり込むと、女をベッドに押し倒した。欲情の捌け口さえあればよかった。ネグリジェをはぎとり、おれも服を脱いだ。女の柔肌が露になった。

柔らかな肉体の上を、おれは泳いだ。浅紅の乳首を激しく吸い、茂みに顔を埋めた。

意識が朦朧としていた。それでも、抱かずにいられなかった。薄れゆく正気の中で、性欲だけが異常に騒ぎ立てていた。

女の股間に深く腰を沈めた。蜜がおれ自身にまとわりついた。腰を動かした。膺壁をこねくり回し、子宮の奥を突いた。

女が激しく呼応した。俺の右肩に噛みつき、自らも腰を動かした。

煌々とした灯の下で、裸の男女が野獣になった。女の悦楽の叫びに男の喘ぎが絡みついた。

情欲の塊が、下腹部でざわめいた。それが逃げ路を求めて吹き上げてきた。次の瞬間、おれは女の中に勢いよく精を放っていた。

記憶はここで途切れた。後は泥のような睡魔に埋没するだけだった。

ベッドの上の目覚まし時計が、乾いた秒を刻んでいた。ベッドから半身を起こした。目眩を感じ、後頭部に鈍痛を覚えた。気分はやはり、すぐれなかった。

ベッドの脇に腰掛け、床に転がっているセブンスターに手を伸ばした。一本を口にくわえ、ライターで火をつけた。

紫煙が立ち上った。煙をしばらく肺の中に溜めた。それをゆっくり吐き出すと、気分が幾分、落ち着いたような気がした。

「起きたの？」背後で女の掠れた声^{かす}がした。「朝方、いきなり来るんだもの、驚いちゃった」

振り向くと、女が半身を起こすところだった。弾力性に富んだ乳房が、反動で惱ましく揺れていた。

「退院したのなら、連絡ぐらいくれてもいいのに」

女が厚めの唇を拗ねたようにすばめた。濃い眉毛が気の強さを物語っていた。

女がベッドから身を起こし、バスルームに消えた。戻ってくるのを待って、おれもシャワーを浴びた。排水口にソバージュヘアーが絡み合っていた。

女の名前は重松明美といった。クラブのホステスが、彼女の職業だ。年齢はおれと同じである。

バスルームから出ると、おれは脱ぎ捨てたままの服を着た。靴下を履きながら掛け時計に目をやった。午後三時十分だった。

「出かけるの？」

明美が言った。すでに新しいショーツを穿き、白いブラジャーのホックをかけているところだった。

「ああ、後樂園ホールさ。そこで明日の世界戦の計量が行なわれる」

「食事は？」

「いらない。それより……」と、おれは振り向いた。「すまんが、少しばかり用立ててくれないか」

明美は躊躇いもなく黒いハンドバッグに手を伸ばした。柄模様の財布を取り出し、二万円を差し出してきた。

それをジーパンの前ポケットに挿し込むと、リビングルームを横切り、玄関に向かった。

明美の声が背中に飛んだ。

「あなた、顔色が悪いわよ。口も回ってないし。しっかりと療養したの？」

「ああ、しっかりとやった。療養する振りをな」

「薬は？」

「もう必要ない」

「大丈夫なの？」

「平気だ」

マンションを出た。生暖かい風が吹いていた。鉛色の空を見上げると、風で流される黒雲があった。

明美のマンションは、早稲田通りと明治通りが交差する辺りにあった。高田馬場駅には十分ほど歩けば着く。足を速めた。後頭部がまだ、疼いていた。目眩も治まってはいない。色褪せた街の喧噪が耳に煩わしかった。

水道橋の後楽園ホールに着いたのは、四時を少し回った頃だった。隣立する東京ドームの周辺に夥しい数の人が蠢いている。黒の格子模様の入った黄色いメガフォンを手にする者がやたらと目に付いた。

おれは後楽園ホールのエレベーターに乗り込んだ。五階で降りると、通路を迂回して、控室へと続く短い階段を降りた。

控室からあぶれた者たちが通路に屯していた。階段の登り口付近に立つ背の高い狐顔の若い男に近寄った。

「計量はもう終わったのか？」

男が驚いたようにおれを見た。

「いいえ。これから行なうところだと思いますが」

人垣をかき分け、控室に向かった。ドアが開けられたままの控室は関係者でごったがえしていた。

爪先立ちで、中の様子を窺った。背筋の盛り上がりが見界をよぎった。藪一也の背中だった。人垣をさらにかき分けた。ブリーフ一枚だけの藪が、こちらに背中を向けて、計量台に足を乗せていた。

計量係が顔を近づけ、秤量機ひょうりょうきの針を調整していた。

「五七・一キロ、ジャスト！」

控室から拍手が起こった。計量台を降りた藪が振り向いた。カメラのフラッシュが焚かれた。藪が両腕をかがげ、ガッツポーズを見せた。

「藪選手はこれからドクターの検診を受けます」

誰かが大声で言った。人垣が崩れた。百七十センチの藪がこちらに歩いてきた。ハードな減量のせいか、肌には艶がない。が、少し突き出た口元は不敵に笑ひ、目の底には獣のような鋭利な光が宿っていた。

藪の眼光が、おれをとらえた。奴もまた、先程の狐顔の男と同じく、ハツとしたような表情を浮かべた。

藪は少し背後を気にした。それから、おれに近づくと、声を落とした。

「明日、見て下さい。必ずベルトは奪います」

おれは、無理だというふうに首を横に振った。藪はあからさまに不快の表情を浮かべた。だが、言葉を返すことなく、またチラッと背後に視線を移すと、おれの前から姿を消した。

藤倉ジム会長・藤倉洋蔵のポマードの効いた小さな頭が見えた。奴は眼鏡の下に隠し持った狡賢かしこい本性を垣間見せることなく、もつともらしく振る舞っていた。

怒りを覚えた。誰もいなければ、この場で奴を叩きのめしてやりたかった。

おれとの接触を断つこと——。これが、現役続行を希望する藪に突きつけた、奴の条件だった。藪がしきりに背後を振り向いたのは、その藤倉の視線を懸念したからである。

崩れかけていた人垣が、いつの間にか統一性を保っていた。

チャンピオンのアルマンド・ケニーの鍛え抜かれた褐色の肌が躍動していた。関係者へのサー

ビスのつもりか、軽快なタップダンスを披露している。その卵形の顔に浮かぶ笑みが、ブラジル人特有の陽気さを發揮していた。

ケニーのマネージャーらしき初老の男が、コミッショナーの小山稔と控室の片隅で、何かを話し合っていた。トレーナーのケビン・コストロがふくらとした顔に笑みを浮かべて、ケニーの動きを見つめている。

コストロはかつて、おれのライバルだった。対戦成績は一勝一敗の五分。最初にグローブを合わせたのは、おれが個人的なスポンサーの助けを借りて、南米を転戦した十年前のことである。このときは、おれが辛うじて判定で勝ったが、その一年後、コストロはWBCの世界ウェルター級王座に君臨していた。

八年前、おれは奴の持つ世界タイトルに挑戦した。コストロのテクニックが数段進歩し、パンチ力がメガトン級になっていることを、そのときのおれは身をもって味わった。

奴の前に散ったのは五ラウンドだった。顎の骨が砕けていた。おれの現役最後の試合だった。

コストロがボルトガル語でケニーに何かを言った。ケニーが動きを止めた。それから、OKとばかりに右手を上げ、計量台に足を乗せた。

「五六・四キロ。ウェイト、パス！」

計量係が大声で言った。拍手がまばらに起きた。ケニーは嬉しそうにコストロに抱きつくと、次に側にいた肉感的な金髪女にブリーフだけの肉体をあずけた。

ブリーフの股間が見事に盛り上がっていた。間違いないと勃起していた。奴が類稀な性豪だということは、雑誌で読んで知っている。世界戦の前夜にも女との愛欲に耽るといふ情報もある。半年前、八度目の防衛戦のために初来日したときは、日本の高山敬義をぶちのめした当夜、ソーブランドの梯子をしたという噂まで流れた。

ケニーが金髪の女の肩に腕を回しながら、こちらに向かってきた。

「これからドクターチュックだが」と、報道陣の一人から英語で質問が飛んだ。「その体の傷はいつたいていどうしたんです？　去年の高山戦のときもそうでしたが……」

傷と言われて、ケニーの肉体を凝視した。艶めいた褐色に目立つことはないが、たしかに腹部から胸にかけて、無数の錆色の擦過傷がついていた。その擦過傷は長さが二十センチほどのものもあれば、点のように短いものもあった。

「これか？」ケニーが質問の主に顔を向けた。「これは、おれがいかにかに厳しいトレーニングをしているかの証さ。想像を絶するほどのな」

「野性本能を磨くためアマゾンの密林で猛獣と闘っているという話も伝わっている。いったいそんなことが可能なのか。本当だとすれば、その傷は猛獣につけられたものですか？」

「それは企業秘密だ。ただ、明日になれば、リングでその成果を披露することができるぜ。そう。この傷と引き換えに、藪を葬ることが、な」

無数の擦過傷に関するケニーの説明が、真実なのか、偽り事なのかは、そのはぐらかすような表情から読み取することはできなかった。

しかし、藪を葬るという言葉……。その天性の才能や残忍性から言って、たしかにケニーは藪を完膚なきまでに叩きのめすだろう。九割近くのKO率を誇る、その戦慄のパンチを情け容赦なく見舞うに違いない。

結果、藪は再起不能になるのだ。神経の機能を停止させるほどの深いダメージ、拭い去ることのできない恐怖心、ドラムカー症状の噴出……。これらが、藪という未完成の芸術品をボクサー以前の並み以下の男に成り下げてしまうだろう。リズムとバランスを失った藪のボクシングスタイルをおれが自分の手で、修正する前に……。

ケニーが踊るような足取りで、目の前を横切った。その鍛え抜かれた後ろ姿が診察室に向かうのを見届けると、近くにゐる報道陣にケニー陣営の宿泊ホテルの名を聞いた。

大帝国ホテルが、彼らの宿泊先だった。

おれは息苦しい計量会場を後にした。ケニー陣営が食事を終えて、ホテルに戻ってくるのは、おそらく夜の八時前後になるだろう。

後樂園ホール近くのサウナ風呂で、暇を潰すことにした。赤坂にある大帝国ホテルに向かったのは、その二時間後のことだった。

大帝国ホテルに着いたのは、午後の七時三十分だった。ロビーのソファに腰を降ろし、ケニー陣営がやってくるのを待った。外国人ビジネスマンが、やたらと目に付いた。奴らはおれの姿を認めるたびに、好奇に満ちた青い眼差しを投げかけてくる。

だが、少しも気にはならなかった。おれの頭はまもなく始まろうとするケニーとのやりとりばかりを想像していた。

ケニーがホテルの正面玄関に姿を現わしたのは、八時を十分ほど回った頃だった。ケニーの格好はラフで、薄茶色の上下のウエアを身に纏っていた。マネージャーのアルマとトレーナーのコステロが、その両脇にいた。

彼らはホテルまで付き纏ってきた数人の報道陣と談笑していたが、やがて報道陣を残してエレベーターに乗り込んだ。

ソファから立ち上がると、エレベーターの行き先を目で追った。エレベーターが止まったのは、三十七階だった。しかし、ケニーの部屋が三十七階のどれなのかは、確認できるはずもない。

コステロやアルマの目を逃れ、ケニーだけを呼び出すにはどうしたらいいのか――。

ホテルのフロントは泊まり客のプライバシーを守る義務がある。フロントから直接ケニーを呼び出すのは不可能だろう。外部からのケニーへの連絡事項があった場合、ケニー陣営はマネージャーなりトレーナーを経由することを、予めフロントに伝えているに違いない。

ボクサーが敵国に乗り込んだときは、本人以上に、その取り巻きがナーパスになる。彼らは常に敵地であるが故の策略を懸念し、ときとして過剰な神経の使い方をする。

しかし、敵地における策略でひどい目に遭っているのは、むしろ日本人ボクサーのほうかもしれない。タイで防衛戦を行なった元東洋太平洋フライ級王者の飯田源造は、試合当日、ひどい下痢に悩まされ、タイトルを失っているが、ホテルの食事に下剤が混入していたことが、後になってホテル従業員の証言によって判明している。

おれも策略にはまったことのある一人だった。南米転戦中、自国のボクサーを勝たせたいプロモーターの奸計で、蒸し風呂のような控室に五時間も閉じ込められたのだ。試合は辛うじて判定で物にすることができたが、リングに上るときはすでに発熱しており、あのおきのおれの闘いぶりといえば、酔っ払いのそれと変わりがなかったかもしれない。

それにしても……。

時間ばかりが浪費した。ケニーに接近する手段も思い浮かばず、ロビーをうろつき回った。

だが、しばらくすると、「妙案」が浮かんだ。なぜ、早く気がつかなかったのだらう。三十七階のフロアに降り立ち、すべての部屋から漏れてくる宿泊客の気配に耳を澄ませばよかったのだ。あるいは、ケニーの特徴を示唆するような空気が、漏れ伝わってくるかもしれない……。

エレベーターの前に立った。エレベーターが下降してきた。扉が開き、足を踏み入れた。

ふと、頭の後ろから化粧の匂いがまとわりついた。振り返ると、金髪の女が乗り込んできた。

どこかで見た女だった。肉感的なその姿態を、目で舐め回した。

思い出した。計量会場でケニーといちゃついていたブラジル女だった。おれは直感した。女はこれからケニーの部屋に向かう。世界戦前夜の、いや、日々の儀式として、ケニーの性欲の捌け口として、使い古した性器を提供しにいくのだ。

他に人はいなかった。二人だけの密室が加速を増して上昇していく。

金髪の女はおれに背を向けていた。おれの視線に危険なものを感じているのか、両肩が震えていた。

エレベーターが三十七階に到着した。女に続いて、おれも降りた。女が走り出そうとした。咄に後ろから女の手首を掴み、右手で口を覆った。掌の中に女の短い悲鳴が籠もった。

「怪しい者ではない」おれは英語で言った。「ちよつと、頼まれてほしいことがあるだけだ」

口を塞がれたまま、女が首を回した。アイシャドーに塗られた派手な目が、懇願するように頷いていた。

手を離した。掌に口紅の真赤な色がこびりついていた。

女と向かい合った。

「おれは、ケニーが明日の晩、闘う相手のトレーナーをしていた者だ。カズヤ・ヤブのだ。そのヤブのことで話したいことがある、とケニーに伝えてほしい」

女の大きな目から、恐怖の色が幾分消えたような気がした。沈黙が少し流れた。女がようやく口を開いた。

「そう伝えるだけでいいの？」

流暢ではないが、日本語だった。

「日本語が話せるのか？」

「私、ブラジル日系移民の子孫だから。祖父が日本人だったの」

そういえば、金色の髪とグラマーな肉体、それに派手なアイシャドーを除くと、女の表情にはどこかに日本的な柔らかさが染みついている。

「日本語ができるのなら話は早い」おれは言った。「できれば、ケニーの部屋まで案内してほしい。どうせ奴は、あんたとの夜の戦闘準備に入ってるんだろう？」

女は「夜の戦闘準備」という言葉の意味が分からないようだった。そのままおれを促すようにして、フロアを先に歩いた。

ケニーの部屋は3711号室だった。女がチャイムを鳴らすと、すぐにポルトガル語の応答があった。

留め金を外す音が聞こえ、ドアが開いた。にこやかなケニーの褐色の顔が、おれを認めた途端、訝しげに曇った。近くで見ると、整っていたかに見えた顔立ちは、思ったほどではなかった。

鼻孔が横に広がり、右の目尻には三センチ程度の古い傷跡がある。

だが、その体付きを見る限り、奴は紛れもなく世界王者に相応しい肉体の持ち主だった。身長は百七十五センチのおれより少しだけ低い、胸板の厚みや太い首は、鍛え抜いたヘビー級ボクサーのそれと変わりがない。

ケニーが女に顔を向け、何かを口にした。女が言葉を返した。「ヤブ」という言葉が、会話の中に聞こえた。

「そうだ。少し前まで藪のトレーナーをしていた」と、おれは英語で言葉を引き取った。「藪のことであんたに話したいことがある—」

ケニーは鳶色とびいの目でおれを見た。嘲るような目の色だった。

「せっかくだが……」と、ケニーはけっして流暢とは言えない英語で言葉を返した。「藪に勝つ